

私が見たスタンフォード

慶應義塾大学医学部生理学教室 正島啓吾

1. 研修に期待した事とその成果

現在、放射線技術は基礎から臨床、かつ分野横断的に広く利用されている。私は基礎研究としてMRIを用いた神経画像解析法の開発や病態モデルを対象に再生治療の画像評価に従事している。基礎研究、特に前臨床研究において重要な点は、臨床現場における課題を如何にして取り入れ、医療に還元するかである。

スタンフォード大学の放射線科はルーカスセンターを中心として基礎、臨床医学一体型のイメージング研究を実施している。その施設がどのようなシステムで運用され、結果的に臨床の最先端に至っているかは、実際にその場に行き、見聞きしなければわからないと考えて本研修の参加を希望した。

研修中に企画された講義は、先進的なイメージング研究の内容はもちろん、大学の歴史、放射線科の運営、放射線科の将来像など学術大会では聞くことのできないことばかりであった。特に、学際的視野から生存競争を強く意識した次世代の放射線医学像、多方面からの研究費の獲得、分子イメージングやIT技術の積極的な吸収、新たな分野の創造と起業、企業との密な共同研究体制など幅広い戦略的な取り組みを知ることができた。

2. 日米の診療放射線技師の違いと診療放射線技師の国際的視野

私は、スタンフォード大学ルーカスセンターの取り組みを知り、また大学病院で勤務している診療放射線技師との意見交換会を経て、「日米の診療放射線技師の違い」について次のように認識した。「日米の診療放射線技師の違い」の最も特徴的な点として米国の放射線技師の専門性が挙げられる。これは進化し続ける画像医学において高いサービスを供給するという意味では効果的である。しかし、日本の放射線技師養成制度や病院における業務システムのように、放射線技師が1つの資格の下、全モダリティに対応することは業務効率そして医療費の高騰を抑える観点から理に適っていると考えられる。さらに日本でも各分野のスペシャリストを養成しており、その更新制度の中には定期的に論文執筆が必要である資格もあり、日本の制度の方が優れていると感じた。

また、同様に研修中に企画された「診療放射線技師の国際的視野」の意見交換会から、魅力的な放射線技術学の将来像として幾つもの意見が挙がった。

どの職種であれ国内を活性化するために国際的視野を持つことは必要であり、その際、海外の知識を取り入れるのみでなく、海外に発信できる能力と発信するものが無ければ共存できない。そのために、今回のような海外研修制度や海外の学術大会との連携など学会の企画は極めて重要であり、本研修制度を引き続き多くの会員の方々が利用できることを誰もが切望していた。また、教育レベルでの意見もあり、例えば、大学授業の英語化、海外教育施設との単位交換、他分野出身者の資格取得制度、大学院レベルでの基礎研究の充実など豊富な意見が交わされた。

3. 研修での経験を今後の活動にどのように活かすか

モズレー先生は、研修中に「パワー」、「バトル」という言葉を何度も我々に投げかけてくれた。これはまさにスタンフォードが生んだシリコンバレーの起業精神を示す言葉である。次世代を牽引するためには常にバトルは存在し、そこで勝ち残るパワーが必要である。日本から研修に来た我々に対し、とても親身に伝えたその言葉は、今、何かやらなければ、今を次の世代に残せなく、また来る次世代の医療から取り残されると感じた。本當はわかっているつもりだったけれど、モズレー先生からの言葉はとても心に響き、今後より新たな分野に飛び込んで研究を進めていきたいと率直に思った。

最後に、大変素晴らしい海外研修を企画・支援して頂いた日本放射線技術学会ならびに GEHC-J、スタンフォード大学の方々、引率頂いた北里大学の佐藤先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。



Lucas Center の 7T MRI 室にて(筆者前列中央)